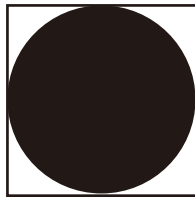


InSEA



公益社団法人 日本美術教育連合 ニュース

No. 158

2020. 4

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-30-14 文京ビル 206 号

公益社団法人 日本美術教育連合

発行人 理事長 大坪圭輔

ニュース担当 北川智久

E-mail: info@insea-in-japan.or.jp

公益法人化10周年

公益社団法人 日本美術教育連合理事長 大坪圭輔

1953年2月に、社団法人日本美術教育連合は設立されました。それから58年後、公益法人制度改革に伴い、2011年3月には公益社団法人日本美術教育連合として認定されました。その社団法人から公益社団法人へと切り替わる第1回定時総会は、東日本大震災から2か月後の5月8日でした。被災地域への支援が急がれる中、また計画停電による暗い東京の中での公益社団法人日本美術教育連合の出発でした。

公益法人の定義は、「一般社団・財団法人のうち、民間有識者からなる第三者委員会による公益性の審査（公益目的事業を行うことを主たる目的とすること等）を経て、行政庁（内閣府又は都道府県）から公益認定を受けた法人」（内閣府ホームページより）となっています。本連合の公益目的事業は3つありますが、その1は、「美術教育研究発表会及び研究収録の刊行及び研究資料の収集」です。具体的には「日本美術教育研究発表会」の開催と「日本美術教育研究論集」の刊行になります。令和元（2019）年度は、第53回の発表会を開催し、論集53号を刊行する計画で進めておりましたが、台風19号によって、発表会は中止を余儀なくされました。論集53号は皆様の積極的な投稿により、また担当の皆様のご尽力によって、無事に刊行することができましたが、本連合の根幹となる公共事業としての発表会の中止は真に残念でした。安全第一の判断であったとは言え、台湾からのポスター発表予定者を含め、発表を予定されていた皆様に心よりお詫びを申し上げます。

5月10日に開催予定の令和2（2020）年度第10回定時総会において、役員組織は第5期から第6期へと移行します。そして第6期においては、一つの区切りとして、この公益法人化10周年を振り返り、今後の公益事業の発展を構想したいと思います。

令和2（2020）年度第10回定時総会 招集通知

下記の要領で定時総会を開催いたしますので、会員の皆様はご出席のほどをお願いします。

□日時：令和2（2020）年5月10日（日）13：00～14：15

□場所：東洋大学白山キャンパス2号館16階スカイホール（予定）

□議案：①第6期役員選出 ②令和元（2019）年度事業報告 ③令和元（2019）年度決算
④報告事項（詳細は連合ホームページをご覧ください。http://insea-in-japan.or.jp/）

□出欠：ご欠席の場合は、委任状を必ずご送付ください。

□総会記念美術教育リレー講演会2020：14：30

（入場無料です。会員以外の方もお誘いあわせの上ご参加ください。）

演題 「バウハウス100+ 1 バウハウスと日本の美術教育－「構成」・「造形」教育の系譜と現在－」

講演者 杉田 佳穂 氏（ミサワバウハウスコレクション学芸員・『きたれ、バウハウス』展企画）

藤原 智也 氏（愛知県立大学准教授）

指定討論者 茂木 一司 氏（群馬大学教授・連合運営委員）

小林 貴史 氏（東京造形大学教授・連合運営委員）

「第53回日本美術教育研究発表会2019の中止」に関するご報告

研究局担当理事 結 城 孝 雄

今年度、第53回日本美術教育研究発表会2019（令和元年10月13日 日曜日 於：東京家政大学）の開催予定でしたが、2019年台風19号の接近で、やむを得ず中止に至りました。被災されました方々に改めましてお見舞い申し上げます。

台風19号接近予報から、10月6日に理事会・関係者間で協議を始め、開催前提に状況の推移を検討していましたが、交通機関、宿泊関係を考慮して最終判断を10月9日に行いました。やや事前の決定でしたが、結果的に大きな混乱もなく、収束することができました。

今回の研究発表会には、45件のご応募があり、海外ポスター発表にも、台湾から1件のエントリーがありました。定時総会以降、開催に向けて準備に携わっていただきました役員、局員の皆様、ご応募頂きました会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

今回の研究発表会中止で、完成していました発表概要集は、残念ながらすべて廃棄し、応募いただきました会員には、投稿論文応募資格を認定し、そのうち34本が審査を通過して、3月末に『日本美術研究論集53』として発刊される運びです。

今回、自然災害、地球環境が大きな影響を及ぼすことを改めて実感する次第です。本法人も初めての事態でしたが、今後、同様に発生することも想像に難くありません。状況に即して、影響が最小限になりますように対応してまいります。

公益社団法人日本美術教育連合主催 造形・美術教育力養成講座 第5期 報告

事業局長 奥村高明

美術及び美術教育を幅広くとらえ、美術教育の拡充を図るとともに、子どもと造形表現に関する理解を深め、講義と演習を通して教育実践力を高めるために、造形・美術教育力養成講座を実施しました。今年度のテーマは「美術教育ワークショップー越境し、拡張する美術ー」です。幼保・小・中・高・大学教員、学生、院生、美術館関係者、画塾経営者、連合会員などを対象に、1講座2コマ（90分×2コマ：講義とワークショップ）、全体で4講座（合計8コマ）を行いました。日本美術教育連合のHPに内容等を告知し、「こくちーずプロ」を用いて講座ごとに申し込みを受け付けました。各講座の詳細は以下です。

1. 第1回講座「言葉の壁を乗り越えるデザインと伝え方」

(1) 日時：2019年12月14日（土）講義 13：30-15：00 ワークショップ 15：15-16：45

(2) 場所：明治学院大学

(3) 講師：桐山岳寛 大同大学情報デザイン学科専任講師。米国IDA Design Awards Bronze medal 受賞（Print-Books部門／2018）、「説明がなくても伝わる図解の教科書」（かんき出版）

(4) 内容：前半は、モンゴルにおけるデザイン教育を通じた国際協力活動経験の興味深い講演から、言葉の壁を乗り越えるデザインと伝え方のポイントを再考する内容に関する講義が行われました。後半は「ふるさと納税の仕組みをわかりやすく図解する」という課題をもとに、試行錯誤した結果をプレゼンテーションしました。

(5) 参加者：会員・学生15名 一般1名（合計16名）



2. 第2回講座「目で見える美術を乗り越えて一見えない・見えにくい人と共につくる新しいアートー」

(1) 日時：2020年1月11日（土）講義 13：30-15：00 ワークショップ 15：15-16：45

(2) 場所：明治学院大学

(3) 講師：日野陽子 京都教育大学准教授。研究テーマは視覚障害がある人々と共に行う美術活動、京都国立近代美術館の所蔵品の触察ツール「さわるコレクション」作成（2017～）。

(4) 内容：前半は日本の盲学校の美術教育の変遷や、長年、視覚障害がある人々と共に自身が経験してきた鑑賞活動、ミュージアムへのアプローチ等についての講話が行われました。後半は、日野先生がゼミ生と共に考案、制作した京都国立近代美術館の触察ツール「さわるコレクション」を用いたワークショップが実施されました。

(5) 参加者：会員・学生7名 一般6名（合計13名）



3. 第3回講座「アートと社会のこれからの関係を考える」

(1) 日時：2020年1月25日（土）講義 13：30-15：00 ワークショップ 15：15-16：45

(2) 場所：武蔵野美術大学 デザイン・ラウンジ

(3) 講師：上坂真人 株式会社アマナ・プランニング担当執行役員。IMA等アートビジネスを立ち上げる。武蔵野美術大学デザイン情報学科 客員教授（2019～）

(4) 内容：前半は、アートによってビジネスパーソン、地方、アートシーンは活性化するのかを論点に、アマナが手掛けるアートフォトプロジェクトやギャラリー「イエロー・コーナー」等の事例に触れながら、ビジネスにアートが必須であることや、アートと企業・金融機関との間に良好な関係を形成する必要などについての講話が行われました。後半のワークショップでは、日本の美術教育の課題、日本のアートメディアの形成などについて活発な協議が行われました。



(5) 参加者数：会員・学生2名 一般11名（合計13名）

4. 第4回講座「越境し、拡張する美術鑑賞Ⅱ」

(1) 日時：2020年1月26日（日）講義 13：30-15：00 ワークショップ 15：15-16：45

(2) 場所：武蔵野美術大学 デザイン・ラウンジ

(3) 講師：杉浦幸子 武蔵野美術大学芸術文化学科教授。多摩六都科学館組合事業評価委員会委員、太田市美術館・図書館運営委員会委員等。

(4) 内容：前半は、アートと社会をつなぐ鑑賞のデザインに関して、イギリスでの留学経験、子どものためのプライベート鑑賞教室、横浜トリエンナーレ2001教育プログラム担当、森美術館パブリックプログラムでの教育活動、乳幼児の鑑賞活動の研究など、鑑賞者主体の“見ること”の意味と可能性について講話が行われました。後半のワークショップでは、作者とともに作品を鑑賞する活動を通して、会話の中で鑑賞を深めていく活動が行われました。



(5) 参加者：会員・学生4名 一般10名（合計14名）

参加者は、会員・学生28名、一般28名の計56名でした。幅広い分野の講師を招聘し「越境し、拡張する美術」というテーマが実現できたかと思います。また2／3以上を受講し、規定を満たした3名の参加者に、公益社団法人日本美術教育連合の「認定書」を授与しました。



公益社団法人日本美術教育連合主催

《造形・美術フォーラム2019》の記録

- 演 題 **葛飾北斎の熱い生涯**
- 日 時 **令和元(2019)年12月22日(日)**
- 場 所 **すみだ北斎美術館 講座室**
- 講 師 **小林 忠 氏**
岡田美術館館長 国際浮世絵学会会長

□講師紹介

1941年東京都生まれ。
東京大学大学院(美術史専攻)修了。
東京国立博物館絵画室員、名古屋大学助教授、東京国立博物館資料調査室長、同情報調査室長、学習院大学文学部教授、国際北斎学会会長、千葉市美術館館長、『國華』主幹などを歴任。
主要著書
『江戸絵画史論』(サントリー学芸賞受賞)、『江戸浮世絵を読む』(ちくま新書)、『100% HOKUSAI! 北斎原寸美術館』、『江戸の浮世絵』、『江戸の絵画』。

31名参加の《造形・美術フォーラム2019》の概要は次の通りです。

- 講 演 **「葛飾北斎の熱い生涯」** **小林 忠 岡田美術館館長**

改めまして、今日はお招きいただきましてありがとうございます。公益社団法人 日本美術教育連合ご主催のこと、先生方がお集まりのようで、どういう話をしたらよいかと考えました。ここ、すみだ北斎美術館は海外からのお客さんが大変多いそうでほぼ3分の1は外国の方だと、先ほどお話を伺いました。北斎ほど国際的に知られている日本の江戸時代以前の古典美術の人としては最も知名度の高い人です。北斎のことを知らないインテリは、ほとんどいないんじゃないかと思うくらいですね。多少美術とか歴史にお詳しい方は北斎という人を通して絆を結べる、そういう存在だろうと思います。

さて、その北斎は、本所割下水(ほんじょわりげすい)掘割にした下水道。特に今の墨田区にあたる江戸本所にあった掘割およびその近辺)の付近に家があったはずだと思ひ、かつて聞いてみたことがあります。「そんなえらい先生が居たそうですね」というお返事で、結局は具体的な場所まではわかりませんでした。その割下水というのは、今は道路の下に消えてしまっています。当時私が尋ねたご主人の話では、関東大震災の時に多くの人がその水の中に入って亡くなってしまったという悲しい思い出もあるんですよ、と教えてくださいました。関東大震災から遙か遡った江戸時代にここに確かに北斎が居たという想いにもさせられました。ある意味で「北斎美術の聖地」にお招きいただき、北斎の話をさせていただけることを、大変光栄に思っております。私は40年ほど大学の教師をやっておりましたので、どうしても聞いてくださる方にレジュメを配る癖がありまして、しかもだいたい色んなことに話が逸れがちでありますから、列車のレールのようなつもりで目を通していただければ幸いに思います。最近風邪をひいてしましまして、いつもの美声を披露できずお聞き苦しいかもしれませんが、どうぞお付き合いいただければと思います。

まず最初に、北斎の生没年を西暦で示しました。今年は、没後170年なんですね。1849年に亡くなっておりまして、数年後にペリーが日本を脅かしに来るという。明治の世もあと十数年という時までご存命だった比較的近い昔の人でありました。生まれた年が1760年ですから、来年は生誕260年。つまり今年が亡くなった記念の年であり、来年が生まれた記念の年であるという時であります。「変貌を遂げた熱い生涯」というタイトルをつけさせていただきましたが、多分、欧米人が北斎を尊敬する所以の一つは、自分の人生を自分の力で切り開いた人だということだと思います。非常にめまぐるしく自己改造をした人です。名前を変えたことが三十数度ある。家移りしたことが生涯で93回ある。私もよく引越すると人に言われていますが、まだ二十数回です。残念ながら北斎先生には遠く及ばないです。三十数種あると言われる北斎の画家としての名前の中で、不染居(ふせんきょ)というのがあるんですね。「居ることに染まらず」ということで、停滞することをしない、いつも自分を変えていく、励ましていく、そういう意味でたいへん熱い人だったといえます。本日は主に活躍した画家としての画名で、「春朗(しゅんろう)期」、「宗理(そうり)期」、「北斎期」、「戴斗(たいと)期」、「為一(いいつ)期」、「画狂老人(まんじ)期」と六つの時期に分けさせていただきましたが、おおよその目安であります。

後ほど画像が出てきますが、「葛飾北斎」の「葛飾」は地名なんですね。今の葛飾区はたいへん文化度の高い地域ですが、当時の江戸時代とはまるで違う印象だろうと思います。浮世絵を支えた江戸の人にとっては、川向こ



〔写真〕前頁は、講演フライヤー、小林忠先生、会場のすみだ北斎美術館(c)Owashi Yosuke。

本頁は、開会の辞の山口喜雄理事、講師紹介の橋本光明運営委員、参加者に向かい熱く講演する小林忠先生。

うの葛飾という田舎、「田舎者の北斎」という位置付けをしたんですね。ちゃらちゃらした江戸の都会人とは違うんだと。骨太の土の匂いのする、そういう自分でいたいというような意識だったろうと思います。「葛飾北斎」の「葛飾」においては、今は画家としての姓になっていますが、当初は地名として、しかも彼は自ら百姓八右衛門とも名乗っておりまして、華やかな江戸っ子とは違うんだという意識を持っていたことをご紹介しておきたいと思います。数え年90歳で亡くなったということなのですが、これは江戸時代では大変な長寿であります。だいたい60歳になったらもう一度還暦ということで干支を最初から始めるのです。赤ちゃんに生まれ変わるんですね。そして61歳から1歳2歳と数え始めるほど稀な長寿が60歳。だいたい50歳以前に亡くなっている時代になります。それが古希も過ぎ、米寿も過ぎて、90歳の4月18日に亡くなっております。陰暦ですので、ここである4月は夏であります。そこで彼は辞世の句をこう詠んでおります。「人魂で行く気散じや夏の原」。気散じとは気を晴らす、散歩に行く。「人魂になって、夏の野原に散歩に現れるよ」という意味です。こういう辞世の句というのは、あらかじめ詠んでおくんですね。多分、4月になった途端にこの句を用意したんじゃないかと思いますが、その4月18日に亡くなる時にそばにいた「応為」という娘（自分を「おーい、おーい」と呼ぶので、自ら「おーい」という画名にした）が最後まで看取るのですが、周りに何人か弟子や知人が集まっていた場所での証言がありまして、「あと10年生かしてください」と神様に祈っていたと。「10年が無理ならばあと5年生かしてくれれば、自分のもっといい真正な画家になれるだろう」と言ったそうです。90歳の老人があと10年、値切って5年でもいいから生かしてほしいと願う、凄まじい生き様を最後まで貫いて、周りの人を励ましたのだらうと思います。実際、80歳代から90までの最後の10年間、本当に素晴らしい域にまで達しているなと思います。ちなみに私ごとですが、先ほど、幾つになったのだと聞かれましたが、お正月に数えて80になります。私は数えが好きですね。昔は正月元旦にみんな一つ歳をとった。お母さんのお腹の中にだいたい1年近くいるわけですから、生まれた途端に1歳というのは、なかなかいい数え方だなと思います。そして、北斎はまだ私より10歳も長生きされたのです。

先ほど司会の山口先生が私に若さの秘訣をお聞きになりましたが、若く見えているだけでありまして、内臓のアルコール消毒も毎晩欠かさないんですね。これは北斎よりも上手だと思います。北斎先生の伝記は岩波文庫によってようやく活字化していただいた『葛飾北斎伝』に載っております。これは明治の時に飯島虚心という方がまとめたもので、まだ北斎が亡くなって間もなく、北斎のことを覚えてる人にインタビューしたり、作品資料を探し回ったりした大変素晴らしい本です。我々が尊敬している鈴木重三先生という方が詳しい註をつけていまして、大変読みやすくできております。興味がありましたらぜひお手にとってみてください。

今日は先生方が多いということですが、北斎の五つの顔の中に「偉大な教師」だったというのがあります。北斎は大変多くの弟子を育てました。名古屋にも大阪にも、江戸だけでなく地方にも、北斎を慕うお弟子さんを活躍させています。そのほかに、北斎といえば、風景画や漫画を想起すると思いますが、早い頃はむしろ美人画家でした。喜多川歌麿という美人画家が存命の頃から美人画家で知られていて、歌麿が亡くなった後も美人画の世界で「宗理美人」「北斎美人」「戴斗美人」という呼び方をされるくらいに、とてもユニークで美しくて気品のある作品を描く美人画家でありました。それから、元祖漫画家でもあります。北斎漫画の初編に序文を書いた人が、「漫画という聞き慣れないこの言葉は、北斎先生が考えたのだ」と述べています。諸橋の大漢和辞典をひきますと、「漫画」というのは鳥の名前「へらさぎ」と書いてあります。今の漫画の語源となるには全くかけ離れていました。私はその序文を読むまで全く知りませんで、「漫」は「そぞろに」「漫步」などと使いますが、思いつくまま描いた絵ということです。そこに描かれているのは森羅万象の他に、神仏とか妖怪とかこの世にないものまで描いております。大変ユーモラスなものもございまして、今のいわゆる「マンガ」に通じるような描写のものもございまして。すみだ北斎美術館では、版画の制作の実際をお見せする催しなどもなさったとお聞きしましたが、原則的には墨の主版の上に、色板の印刷を重ねていきます。当初浮世絵師は、その主版だけの原画を作るのです。そして赤色とか黄色とかを指定をしていき、刷り師にプリントさせる。ですから、最初のイメージは、画家というよりデザイナーの仕事であるかと思いますし、実際北斎はデザイン本を多く出版しております。そういうデザイン的な感覚をもっていたということですね。偉大な教師であったということで実際に弟子は多く、絵手本というのもしばしば出版いたしました。先ほどの北斎漫画もその一つですが、様々な絵の描き方を公開しています。これは江戸時代においては大変不思議な仕事でありまして、当時も一子相伝というような伝統的な世界がありましたけれども、そんな時代にみんな公開してしまう、大変懐の深い人でありました。最後に、生涯現役の顔としては、超後期高齢者と言える80歳代以降に、作品数も多く、驚異的でした。北斎自ら、「画狂人」と名乗るくらいでした。80歳代で江戸から信州まで歩いて3度も行ったことがあるということです。背の高い人だったようで、基礎的な体力もあり、江戸の端から端まで1日で往復するような、健脚の持ち主だったとの証言があります。

葛飾北斎 (1760 ～ 1849)

葛飾北斎の熱い生涯

岡田美術館館長

小林 忠

・春朗期

20 歳～ 30 歳代初め 新進浮世絵師としての多彩な活躍
役者絵、美人風俗画、浮絵、子供絵ほか

・宗理期

30 歳代半ば～ 40 歳代半ば
美人画・狂歌摺物・狂歌絵本

・北斎期

40 歳代半ば～ 50 歳代半ば
肉筆美人画・洋風画・読本挿絵

・戴斗期

50 歳代半ば～ 60 歳代
『北斎漫画』はじめ絵手本・肉筆美人画・春画

・為一期

60 歳代～ 70 歳代
「富嶽三十六景」ほか風景画・花鳥画

・画狂老人卅期

80 歳代～ 90 歳
肉筆画

北斎の五つの顔

- | | |
|---------|---------------------------|
| ・美人画の巨匠 | 宗理美人、北斎美人、戴斗美人 |
| ・元祖マンガ家 | 『北斎漫画』などに見せたユーモア精神 |
| ・デザイナー | 下絵の提供による浮世絵版画の制作、デザイン本の出版 |
| ・偉大な教師 | 多数の優秀な門人の育成と絵手本類による画法の公開 |
| ・生涯現役 | 80 歳代～ 90 歳の驚異の画才完熟 |

〔上図〕小林忠先生作成の配布資料「葛飾北斎の熱い生涯」を横長二段に再編集して掲載。

〔■パワーポイント開始〕北斎の肖像には色々ありますが、『葛飾北斎伝』の口絵に載っている肖像をご紹介します。これはおそらく弟子が尊敬の眼で描いたものだと思います。もう一方は、「八八歳八右衛門」という自画像です。この描写の落差は非常に大きいのですが、私には右側の好々爺な自画像が北斎を身近に感じられます。

【春朗期】

北斎は19歳で入門して、先生の勝川春章から「春朗」という名をいただきます。春朗期とは、その頃をさします。入門して1年で作品発表の機会をもらっていますから、よほど先生に才能を認められたことと思います。多分、そのほかの兄弟子たちからは快く思われなかっただろうと思われまして、というのも、先生が亡くなるとすぐに勝川派を破門されてしまうんですね。《20歳の役者絵》はそういう出来事の前作品になります。背景は川のほとりなので堀の線も直線に描かれ、そこに立つ女性が曲線で描かれた、デザイン的な構成力が強いしっかりとした作品であろうと思います。初期には風俗表現や西洋から学んだ透視遠近法風の浮絵という手法が流行るのですが、そういったものも勉強しております。

【宗理期】

先ほど申しましたように、破門された春朗は、俵屋宗理という江戸の琳派の人に入門をして、その宗理号を引き継ぎます。それが30代半ばから40代半ば頃の作品です。《風流無くてななくせ》という作品ですが、一つ目の望遠鏡を片目を瞑って見るというお嬢さん、それを日傘をさしたお母さんが見つめているという構図です。瓜実顔の優しい姿が印象深い作品です。また、《夜鷹図》という作品も宗理期を代表する作品です。柳の下で客を引く最下級の遊女の姿を描いた作品です。実際は美しい女性ではないはずなのですが、それを後ろ姿で描くことでうまく隠している。柳の向こうには月が浮かび、蝙蝠が飛んでいます。京都の細見美術館にあるとても美しい作品です。このころは商品としての出版が難しかったのか、摺物という作品が多いです。摺物とは、狂歌や俳句、芸能をする人たちの自費出版物です。美しい絵で飾っておけば、狂歌を詠んでもらえる、あるいはいつ何時にどのような演目があるなどの広告用としてなど、文字の情報をカットした摺物であると思います。《亀井戸開帳》などがその例です。《柳の絲》は狂歌の絵本の挿絵の一つです。江ノ島の春の景色ですね。左に描かれているのが江ノ島で、向こうに富士山が見える構図です。《画本狂歌 山満多山》も崖の上から富士山を望む構図で、遠眼鏡で遠方を見ている女性たちが描かれています。おそらく武士の家の身分の高い女性たちで、お化粧や食事を楽しみながら集う、美しい情景の一場面です。

【北斎期】

さて、先ほども申し上げたように、ごく一時期、北斎と名乗る頃があります。「北斎」とは一生涯名乗った名前ではなく、40代半ばから50代半ばにかけて名乗っていました。「北斎」や後の「戴斗」に見られるように、北斎は北斗七星を信仰しておりまして、彼は生涯自分を変えていきますが、空の上では動かない北斗の星を信仰していた人です。《二美人図》は、北斎には珍しく重要文化財に指定されています。先頃の新聞記事で、「浮世絵には国宝がない」というのがありましたが、浮世絵の主なメディアは版画なものですから、版画だと保存の良いものが後に出てくると困るわけです。特にいま江戸東京博物館にて「大浮世絵展」というのがやっておりまして、ここには概ね海外から保存状態の良いものをお借りして展示しているのですが、私は北斎や歌麿の肉筆画から国宝の一つや二つが出ていいのではないかと考えています。冒頭に申し上げたように、浮世絵こそが日本の美術であると海外で評価されています。私の教え子に、上海博物館で学芸員をやっている女性がおりまして、彼女は日本美術の展覧会をやりたいと言っていました。彼女は文人画が専門でしたが、文人画は中国の真似だから相手にされない。そのため浮世絵か琳派の展覧会を企画したいと、それが日本の美術を紹介するのにふさわしいのではないかと、そう言っていました。そこで私はこう言いました。「自虐的な態度は良くないんじゃないの、中国から学んだ文人画だって日本的な魅力があるからあなたは研究の対象にしたのでしょうか」と。しかし、頑として中国の人は中国の真似だという目で見えてしまうから駄目だと。浮世絵か琳派なら日本らしくて評価されるでしょうということでした。この《二美人図》という作品は、絹に非常に丁寧に描かれています。署名もきちっと記されています。「亀毛蛇足」というこの頃よく使われた印章でそれはとても綺麗に押してあるのです。表装の裂に三葉葵の紋が織り出されているので、おそらく将軍家に献上するために用意していた絵なのではないかと想像しています。この絵はMOA美術館という熱海の美術館にございます。時々展示されますので、ぜひ隅々まで見ていただきたいと思います。さて、絵に立ち返りますが、立っているのが吉原の遊女、座っているのが吉原の芸者です。吉原芸者というのは遊女の分を侵さないように男性と交わらず、芸だけをする人たちです。そんな2人の遊び女を



〔図〕『葛飾北斎伝』口絵掲載の肖像と好々爺な自画像、処女作《20歳の役者絵》、《風流無くてななくせ》、《夜鷹図》。

描いたとてもすっきりとした作品です。この作品は私が最も好む美人画でして、よくぞ重要文化財に指定してくれたと喜んでいるものです。

《夏の朝》は、夏姿の女性がすっきりと立っている作品です。これは私が館長を務めております岡田美術館の作品なのですが、先ほどお見せした《夜鷹図》のように、後ろ向きを描いています。ところが、これは美しい女性として、手に持った鏡に顔が映っているようにして我々に見せています。後ろに、天井から吊るして着物を掛ける道具がありますが、それにかかっている縞模様は粋な男性の着物です。なぜ朝だとわかるのかというと、昔の銅の鏡は蓋をしてあるものだったんですね。その鏡の蓋が下に置かれていて、その上に「うがい茶碗」という、うがい用の大きな茶碗、そして朝顔の花が浮かせてあります。そして歯ブラシと、白く小さく見えるのが歯磨き粉です。江戸の人もしっかりと歯を磨いていたんですね。そしてその向こうには、涼しげな金魚鉢が置かれています。家庭婦人であれば、旦那が起きる前に身を正してお化粧をして髪も整えて主人が起きるのを待っているという昔の女性の姿ですが、これは一般女性の風俗を描いており、浮世絵では大変珍しい作品です。

次の作品は《酔余美人図》、小さな絵です。A4サイズより一回り大きいぐらいの作品です。赤い朱塗りの盃が盃の上に転がっていて、ちょっと飲みすぎたかなという女性が三味線箱の上に伏している構図です。これは北斎期の有名な作品であります。この頃、風景画にも目覚めておりまして、《くだんうしがふち》は西洋風の風景画です。遠近法を使い、九段下から市ヶ谷に視線を届かせているのですが、そこに今でもある「うしがふち」のお堀があり、急な坂があります。石垣が右側に見えますが、江戸時代はものすごく急坂だったそうです。荷物をのせた大八車がありますが、その車を坂ノ下で押すという職業もあったくらいだそうです。真下に影が落ち、空には白い雲が上がっている。洋風表現を北斎なりに受け入れた珍しい風景画であります。読本挿絵という本に描かれた《椿説弓張月》という絵があります。江戸時代の本は、文字よりも絵が多いのですが、この読本挿絵は文字で読ませ、時折挿絵が入るのが特徴です。この読本挿絵の世界に、北斎は大変熱心に取り組みます。《椿説弓張月》が描かれた本は、文章で売れたのか、絵で売れたのか、作者の曲亭馬琴と北斎の間で言い争いがあったそうです。これは源為朝が八丈島に行って、自慢の弓を島の人に引かせています。もう一枚、《椿説弓張月》の一場面で、雷が落ちている情景のものもあります。この光や雲の煙の表現などが大変ユニークで勇ましいものです。私がまだ30代の頃、諸先生と『北斎読本挿絵集成』というのを作ったことがあるのですが、大変売れませんでした（笑い）、申し訳ないことをしてしまったのですが、今となっては貴重本です。160部くらいしか売れなかったみたいです。図書館などには入っているかと思うので、ご覧いただければと思います。

【戴斗期】

この時期も大変ユニークな美人画が多いのですが、この時期に《北斎漫画》が大変多く描かれています。その一部をご紹介します。例えば、下級の兵隊がいろんな料理を作ったり、行水したりという場面です。他には、今の漫画に近い、太った人が描かれています。顔の面白さや芸人風のポーズが印象的です。また、お坊さん、ひょっとしたら達磨が縦長にしたり横長にしたりする表情の面白さを見せている。こういうユーモラスな表現もあります。それから、様々な絵手本、例えば《略画早指南》という、コンパスと定規で絵は描けるんだというのと、《新形小紋帳》という、小さな模様をいろいろ描き分けるデザイナーとしての面白い作品を残しています。

戴斗美人の一つである《搦衣美人図》は、ギザギザとした線が増えてきたりする癖が強くなってくる美人画であります。

【為一期】

為一という時期が、一番有名な風景画の時代です。為一という字の「一を為す」の意味は、色々変化するけれども本質は一つなんだという想いのだろうと思います。《富嶽三十六景・神奈川沖浪裏》は、あまりに有名で売れに売れたので、10図が追加出版されています。クイズで、「富嶽三十六景は何図でしょう」、「36図」、「ブブー」というわけですね。46図なのですが、その中でも最も有名なのがこの《富嶽三十六景・神奈川沖浪裏》です。神奈川というのは、横浜沖の大波に逆らって進む船が三艘、それを遠くの霊山である富士山が見守っているという構図です。この画面は、日本をイメージする最も有名な絵だと思われています。来年からでしょうか、パスポートの各ページにこの絵がうつすらと印刷されるようです。4年後には新しいお札、千円札でしたでしょうか、その裏に「神奈川沖浪裏」が印刷されるという、大変北斎にとっては誇らしいイベントが続きます。

《富嶽三十六景・甲州三坂水面》は大変珍しい河口湖に逆さ富士が映った作品です。北斎のいたずら心で、夏の山が、水面に映ると雪をかぶった冬の山に、そして影は真下に映るはずですがそれを少しずらしている。どうしてこういうイメージができるのか、色々な人が北斎を刺激した図版を探しましたが、私は狩野養川院惟信の《富士山麓田植え図》の田植えの頃の富士山がずれている絵から影響を受けているのではないかと考えております。《富士山麓田植え図》を日本の美術館に買ってもらおうと思って持ち主の美術商に聞いてみたら、あれはアメリカ人に売ってしまったと言われてしまいました。《諸国滝廻り》や《千絵の海》のような大変素晴らしい滝や海川の絵



【写真・図】 熱く講演する小林忠先生、九段下から市ヶ谷への風景《くだんうしがふち》、おめでたい絵《富士越竜図》

を描いたのは、70歳代の為一の号を名乗っていた頃です。花鳥画も描きました。

【画狂老人記期】

そして最後の画狂老人記の名前で描く時期ですが、《富士見牧童図》は80歳の時の作品で、現在アメリカのフリーア美術館にございます。フリーア美術館というのは、フリーアさんが建物と作品と巨額のお金を国に寄付したんですね。今、ワシントンのスミソニアンインスティテュートという美術館群のひとつとして大変良い位置にあります。そのフリーアさんは、この建物を寄贈はするけれども、このコレクションを外に出してはいけない、また、他のコレクションを入れてもいけないという条件をつけたのです。厳しいですね。それで巨額のお金は運用運用で、今でもフリーア美術館の年間予算の3分の1はフリーア基金に頼っているという状況です。そういうものですから、この《富士見牧童図》はフリーア美術館に行かないと本物は見られないのです。かつてすみだ北斎美術館がフリーア美術館の作品のレプリカを展示する企画をされていましたが、橋本館長のそのアイデアに心底感心いたしました。

富士山から溶けた水が流れ下ってきます。そこにカゴの中には何も描かれていない、つまり草刈りの牧童がサボっているわけですね。柳の木の腰掛けやすいところに座って、横笛を吹いているわけです。その笛の音が山に向かって響いていく。川が下ってくる。柳の枝は麓への風で流れている。いわゆるムーブメントが画面に流れているし、音まで聞こえるような素晴らしい作品だと思います。これが80歳代の初めの頃の作品です。非常にフレッシュさがあります。《朱描鍾馗図》はニューヨークのメトロポリタン美術館にある作品です。子供を持つ親が一番恐れる、子供を襲う疱瘡という病気がありまして、それを遠ざける神様が朱い鍾馗様だということです。有名な絵描きさんに描いてもらえば描いてもらうほど子供を守れるという親心に応えた作品です。すごい表情で正面を向いております。《富士越竜図》は、日本一高い富士山を竜が越えていくという、大変おめでたい絵です。いろんな画家が描いていますが、これが嘉永2年、亡くなった年の作品です。多分、自分が竜になって富士山を越えていくというイメージだろうと思います。そして《雪中猛虎図》も残念ながらアメリカに渡ってしまった作品ですが、雪の降る中、竹林を這うようにもがきながら進む虎を描いています。先ほどの竜と同じく、自分自身を投影しているかのような絵で、もう少し生かしてくれればもっといい画家になれるのという想いが込められているだろうと思います。100歳まで生きるつもりだったのですね。さて、許された時間は終わりました。今日はここまでいたします。ありがとうございました。

□ 参加者と小林忠先生との質疑応答

質問者 1 (新潟県・教員)

葛飾北斎は日本のレオナルド・ダヴィンチと私は思っています。名前もヴィンチ村のレオナルド、と同じようなネーミングだったことに今日気づき、感心いたしました。質問ですが、一点透視図法は、レオナルドはガラスに描いてわかったということ、だいたい前にテレビで知りました。北斎の富嶽三十六景・日本橋の絵があると思いますが、本当はここには見えない富士があるということでした。あの絵を見ると、一点透視図法なのに右の蔵と左の蔵の透視図法がずれています。これはわざとやっているのか気になりました。いかがでしょうか。

小林忠先生

長野オリンピックがありましたね、その時長野県で北斎展をやりたいということで、北斎の総合的な展覧会をやったのですが、そのカタログに共同監修したオランダの研究者が大変面白いことをカタログに書いてくださいました。曰く、「北斎は非常に勉強家で、北斎漫画でも西洋画の遠近法の絵解きをしている。日本の方は、北斎や画家の遠近法はかなり正しい理解のように思うかもしれないけれど、西洋の絵画に慣れている我々からすると、大変いい加減な遠近法である」、と。「近景から遠景までをえぐるように描いている」、と。

西洋の遠近法は一点透視図法です。一方、日本にも昔からの遠近法がありまして、我々は触覚的遠近法と呼んでいますが、例えば《洛中洛外図屏風》をご覧になりますと、京都の街中から郊外まで、一つの画面に収めています。これは東洋的というより日本的というべきなんだろうと思います。だから、近景、中景、遠景を一緒に見る、右のものも左のものも見る。いわば説明的な、物を絵で語るといふ表現が身についているのだらうと思います。だからルネサンス以降の科学的な遠近法からはズレているのは当然なのだと、長野の展覧会を通して改めて学びました。ダ・ヴィンチと似ているところは、水とか風とか、目に見えないところを非常によく研究しています。北斎も「寄せる波、引く波」を北斎漫画に描いていますし、先ほどの牧童の絵も水の流れ、音などの表現が秀逸でした。本当に、日本のダ・ヴィンチだと思いますね。葛飾の北斎は。



〔写真〕 左から大坪圭輔理事長挨拶、質問者1（新潟・教員）、質問者2（東京・大学教員）、質問者3（東京・小学校教員）。

質問者2（東京都・大学教員）

今日は貴重なお話をいろいろとありがとうございました。我々の知らないところを図版で詳しく教えてくださり本当に勉強になりました。一つだけお聞きしたいのですが、版画制作において原画があって、彫り師、刷り師、版元という関係があって、先ほど北斎はデザイナーであるというお話がありましたけれども、北斎は原画を描いて、彫り師、刷り師に色分けを教えると捉えていたのですが、北斎はどの程度まで彫り師や刷り師との協議を進めて作品完成に向かっていたのでしょうか。

小林忠先生

素晴らしいご質問です。さすが美術教育連合の会ですね。北斎が80歳代で肉筆画に専心するようになったのは、もう彫り師や刷り師に任せるのは辞めた、自分の筆で最後まで完成させたいというこだわりがあったのです。年老いてくると、あと何年この仕事をしていけるかという思考になるのですが、北斎は70歳代で錦絵を辞めてしまうのです。80歳代の作品で、乳母が百人一首の絵解きをするようなパロディがあるのですが、実際に版画になったのは少ないですね。ただ、下絵がたくさん残っているんです。版元が、「こんな細かい彫り指定をされたら敵わん」ということで、版下絵がたくさん残っているわけです。それと先ほどの《千絵の海》ですが、これも出版されなかった下絵がいくつか残っているんです。それを見ると、とてもじゃないがこれを彫り師に掘らせるのは細かすぎる、酷だということ、北斎に簡潔な線が要求され、やっと出版にこぎつけたものです。その下絵の数々を見ると、ああ、これは彫り師や刷り師に嫌われたらどうなあとと思います（笑）。先ほどお見せた本にも、版元に彫り師を指名していたり、今流行りの歌川風の目の描き方は嫌だから、北斎の絵での目や鼻の彫り方を指定したりという手紙が報告されています。刷り師にも墨の濃淡などの指定を行なっています。そんな北斎の版画に対する意識には、どうも不満な部分があったと思います。それが最晩年の肉筆画にその執念が凝り固まっているような感動を覚えます。先ほどの《雪中猛虎図》ですが、一本の線のように見えますが、よく見ると短い線を連ねているんですね。おそらくですが、歳をとると手が震えたりして、どうしても勢いのよい線を描けない。それを補うに余りある短い線を連ねている。それに気づいた時、感動した覚えがあります。当時のこの年齢は、現代でいう120歳位に匹敵します。やはり熱い人だったのだらうと思います。彫り師や刷り師に対して大変な想いがあった人だということをご紹介させていただきます。

質問者3（東京都・小学校教員）

先ほどの九段の作品《くだんうしがふち》を拝見して、急坂とは存じていましたが、あそこまでとは思っていませんでした。私は九段の学校に勤務しているので、あの坂を一生懸命自転車に乗るのですが、今日拝見した作品でも、夏の中に荷物を押す人がいて、汗だくですごく大変なところが一致して、これくらい大変なんだと坂の感じが伝わってきました。もしかしたら、先ほどの富士山も、あの坂にしても、波にしても、北斎は観る人を楽しませるという気持ちがあったんじゃないかなと、そこが北斎の魅力の一つなのかもしれないと感じました。感想なのですが、今日は本当にありがとうございました。

小林忠先生

私は千代田区の文化財の委員を長年担当していました。今でも私は千代田区の住民なんです。九段坂のあたり、昔は東京湾が見えたらしく、船が目標にしたくらい見通しが良かったそうです。本当に急坂で、荷車押しの雇われ人が坂の下に待機しているくらいでした。また、車がお堀に落ちてしまう事故があるような、大変危ない名所だったようです。九段はなぜ九段（くだん）というのか、千代田区教育委員会が説明してくれていますけれども、九段の住宅地の土地造成をしていたようですね。確かに靖国神社に向かう途中に、ちょっと石垣が残っています。九段の屋敷地がある、相当な地表の高さだったのではないかと思います。

質問者4（墨田区・一般）

北斎を各所で見るようになりましたが、真贋はどこで見極めたらいいでしょうか。

小林忠先生

春画を常設展示されているのはおそらく岡田美術館だけだろうと思います。来年生誕260年になりましたら、各地で催し物が開催されると思います。当館でも企画されているだろうと思います。私共も北斎の肉筆画展というのをやるつもりで、肉筆画だけでなく、版画、春画などもあります。春画もうちのコレクションだけでなく、

周りから借りて見せていきますので、ぜひお遊びに来ていただけると春画室で北斎の名作をご覧いただけると思います。

質問者 4 (つづき)

はい、この美術館が出来上がるまでにいろんな人の話もありました。例えば区の方で集めた作品を見て、これは北斎の作品ではないのではないかという意見も出たもので、それに反論するには「真贋」を見極める必要があるのかなと。どうすれば良いかなと思ひまして。

小林忠先生 (つづき)

あッ、「真贋」。すみません。私、真贋……、春画……、聞き間違えましたね（笑）。私の意識は春画の方に行っていました。北斎の春画おもしろいんですけどね。真贋は、やはり考えない方がいいのではないかと思います。普通の美術館はいいものばかり見せているんですね。だいたいその美術館や監修を頼んだ専門家の目を通していきますから。あんまり疑いの目で見ない方がいいです。世の中偽物だらけです、確かに。時代が下れば下るほど偽物が多いわけです。なぜならコピー機、写真機がないわけですから。雪舟は作品数が少なく有名ですが、しかし立派な武家の家では、雪舟の絵がないなんて恥ずかしいことですから、雪舟と署名のある絵を飾りました。したがって、雪舟の名のつく絵がごまんとあります。例えば、ある時、北斎の絵があるので見て欲しいと私に依頼がありました。十数点、しかも汚らしい、箱もないような作品だらけでした。全部偽物でした（笑）。世の中で掘り出し物を見つけようとするほど危ないことはなくて、偽物だらけなんです。だから展覧会でも、1%くらい偽物が入ってるかもしれないですが、あまり疑わずに。美術館で見るものは安心です。先日新聞に新しい学説が出たとありました。美術館を訪れる人は長生きする。健康を維持できると。またある人は病気になったら、部屋いっぱい花を飾りなさい。自分の好きな絵を、複製でいいから飾りなさい。そして好きな音楽を聞きなさい。そうすれば多少の体調不良は治ってしまうと。絵も、本当は美術館で本物を見る方がいいのですが、複製でも良いんですよ、ということです。ただ、耳が遠くなってきてまして、こればかりはどうしようもない、聞き間違いはすみません。（笑）

謝辞・閉会の辞 長田謙一 運営委員

今日は冬の寒い中お越しただいてありがとうございます。葛飾北斎研究で日本を代表する小林先生に素晴らしいお話をいただきました。浮世絵は、長いこと文化の中で必ずしも上席に置かれてきたわけではありません。江戸時代では俗な人間が好むものだ。武士は浮世絵のような世界に親しむのは、お忍びで、ということでした。明治に入ってもそのような文化構造は変わらなかったが、しかし江戸時代の末から海外に輸出されるものが富士山と芸者と浮世絵とに寄せる外国人の好奇心を掻き立て、そして本物の浮世絵が居いていくと日本美術にこの浮世絵が日本の中の価値基準とは違う新たな価値基準で光を注ぐことになりました。それがさらに明治以降の文化の進展の中で、この外国評価を、日本を受け入れて日本の中にあつた価値基準が逆転して、浮世絵が外国に倣って上層に位置づく、つまり浮世絵の世界知は、いかに時代によって価値基準が変わってきたかということを示すバロメーターのようなものだったと思うんですね。その中でも北斎は、浮世絵のステレオタイプをつくり、「浮世絵といえば富士山」のように記号となって私たちの幼少から身に付いてきました。ところが、北斎は、その浮世絵が、普通思われているよりもはるかに豊かではるかに度肝を抜かせるような世界なのだということをたくさん潜ませた世界で、今日のお話を伺ってつくづく感じました。知れば知るほどこんなにイメージの豊かな世界があるのだと、それは「富士山」ということで思い描いている浮世絵の世界とはまるで違った豊かなものであります。

その意味で、小林先生のお話は、汲めども尽きぬ北斎の世界、汲めども尽きぬ浮世絵の世界というものを私たちの中に開いてくださったと思います。実は鑑賞教育というものは、ステレオタイプで絵を見ることの訓練では全然ない。むしろ作品を見ながらイメージの世界がいかに豊かであるかを一人一人が身につけていく、そういう教育の一つの領域だと思います。しかし、そのように鑑賞ができるというのは、今日小林先生のお話をお聴きして、もっともいろいろなことを鑑賞教育に望む側が知っておく必要があると改めて考えた次第です。美術教育に関わる日本美術教育連合に、この葛飾の現場で美術館を立ち上げた当館より橋本光明館長はじめ関係者の方々に会場を提供していただいて今日このような講演会が内容豊かに成就できました。それを支えてくださったのは、お越しくくださった皆様方の熱意であります。どうもありがとうございました。

〔写真〕 謝辞・閉会の辞を述べる長田謙一運営委員。



参加 31 名の内訳			
所在都府県		校種等	
東京	17	小学校	3
神奈川	9	高校	1
千葉	3	特支	1
新潟	1	短大	1
長野	1	大学	8
		美術館	3
		作家	2
		一般	12

運 営		(役員名・敬称略)
企画	山口喜雄・橋本光明・長田謙一	
広報	大坪圭輔・北川智久・三澤一実ほか	
講師紹介対応	橋本光明・山口喜雄 (フライヤー作成)	
大標示・名簿	結城孝雄	
受付	北川智久・畑山未央	
開会の辞	山口喜雄	14:30 ~ 14:33
講師紹介	橋本光明	14:38 ~ 14:40
講演	小林 忠	14:40 ~ 16:10
理事長挨拶	大坪圭輔	14:33 ~ 14:38
質疑応答	小林 忠	16:10 ~ 16:40
謝辞閉会の辞	長田謙一	16:40 ~ 16:55
司 会	山口喜雄	
会場	橋本光明 (懇親会 17:00 ~ 10 名参加)	
懇親会会計	畑山未央・長田謙一・西村德行	
準備・片付け	美術館職員・理事・監事・運営委員	
文章おこし	畑山未央・山口喜雄 (写真)	
本記録編集	山口喜雄 [監修 小林 忠]	

InSEA（国際美術教育学会）報告

国際局局員（InSEAアジア地区評議員） 佐 藤 真 帆

2019—2021InSEA組織について

2019年夏から会長にグレンコッツ（Glen Coutts）が就任し、各地域から選出された評議委員を中心としたInSEA（国際美術教育学会）本部の活動が始まっています。また、アジア地区では、ヨーロッパ地区評議会に続きアジア地区評議会（Asia Regional Council, ARC）が発足しました。世界各地域で地区評議会の立ち上げを準備しているようです。今回は、現在のInSEAの組織について、評議委員の仕事も含めてご紹介したいと思います。InSEAは会長、前会長、副会長、書記、会計から構成される理事会（Executive Board）が中心となります。2019年から2021年は、InSEA組織の重要な運営業務を担う3つの委員会（Research & Praxis, Advocacy & Networking, Publication）が立ち上げられています。また、近年の組織の問題を扱うために2つのワーキンググループ（Membership, Marketing & Social Media）が立ち上げられました。私は地域評議委員として、今季は研究、実践委員会（Research & Praxis）と会員に関することを協議するワーキンググループの2つのグループに所属して活動しております。前者は主にInSEA承認の研究活動、実践活動、出版の審査、Web上での研究会議の開催などで、美術教育の研究や実践の支援を目的としています。後者は、会費の支払い方法や会費の設定が適切かどうかの調査、検討をして理事会へ報告書を提出しています。各地域または世界の評議委員会、委員会やワーキンググループの会議は、主にインターネット上で行なっており、真夜中や朝方などに会議が入ることがあります。また、私たちが取り扱う内容は幅広く様々な知識を必要とし、同じ英語圏内でさえ社会システムが違うために話が噛み合わないこともよくあります。地域ごとに報告書を作成し会議までに提出し、地域の課題や要望を共有し、話し合うようにしています。Web会議での発言は気後れしてしましますが、アジア地域の問題が理解されていないことを実感していましたので、InSEAの中でそれらを共有し解決していくこと、また、他の地域やInSEAの本部の意向を地域に伝えるよう努力していきたいと思っております。

2020年InSEAイベント

2020年は世界大会がないため各地で地域学会やInSEA関連イベントが多く開催されます。InSEAヨーロッパ地域大会が、南スペイン、バエサにて2020年7月6日から9日まで開催される予定です。また、アジア地域大会が中国、上海市の華東師範大学にて2020年11月16、17日に開催される予定です。東南アジアおよび南太平洋地域大会はタイ、バンコクのチュラーロンコーン大学2020年12月9日から11日まで開催される予定です。イベント情報は毎月のInSEA e-Newsletterが各会員の登録メールアドレスへ届けられます。受け取っていない会員の方は、登録情報をご確認いただけないでしょうか。

役員の改選について

第6期令和2・3年度
役員改選選挙管理委員会
委員長 立川泰史

「公益社団法人日本美術教育連合定款第25条」に定める役員の任期満了にともなう新役員選挙は、理事会により役員改選選挙管理委員会委員長に選出された立川泰史により、令和元（2019）年11月17日現在の有権者に対して、被選挙人名簿に15名以内の印をつける投票用紙を同年12月6日付で発送し、郵送による投票を同年12月27日（当日消印有効）締め切りとして実施した。

令和2（2020）年1月21日に、東京学芸大学西村研究室において開票作業を行った。開票作業は立川泰史選挙管理委員会委員長、大坪圭輔理事長、西村德行理事、北澤俊之事務局長が次のような手順で実施した。各投票の消印を確認後開封し、立川委員長が読み上げる番号を3名が記録し、3名の記録の照合を行った。その後、投票用紙及び集計表、無効投票を封印し、立川委員長が管理することとした。

令和2（2020）年1月26日に開催された令和元（2019）年度第7回理事会において集計を開封し、「公益社団法人日本美術教育連合定款細則4」に従い、得票数上位5名を第6期理事候補とする旨提案し、承認された。結果は次の通りである。

有権者数236名 投票総数101票 無効投票数4票、有効投票数97票

理事候補者 奥村高明62票、大坪圭輔51票、西村德行47票、山口喜雄47票、結城孝雄44票

上記の理事候補5名については、令和2（2020）年5月10日（日）に開催予定の令和2（2020）年度第10回定時総会に諮られる。

事務局便り

■会員の異動（敬称略）

〈入会者〉大澤伸枝、大塚裕貴、鹿子木孝子、小室明久、田中直子、白神瑛子、
宮崎恒平、森本 謙、Marzieh Mosavarzadeh
〈退会者〉浅野恵治、丸 雄治

■『日本美術教育研究論集 第53号』が発刊されました

すでに会員の皆様のもとに届けられていることと思いますが、今号も充実した内容の論集となりました。台風19号による研究発表会の中止にも関わらずご執筆いただいた皆様、ありがとうございました。また、会員の皆様におかれましては、本年度も積極的に研究発表・論文執筆をご計画いただき、これまでもまして美術・造形研究を盛り上げていただきますようお願い申し上げます。



■2019年度会費納入、ありがとうございました

本会の運営は、公益に帰することを第一の原則として、会員皆様方の貴重な会費によって成り立っております。会員・賛助会員の皆様のご協力により、昨年度も「造形・美術教育力養成講座」「造形美術教育フォーラム2019」とそれぞれ大きな成果をあげることができました。引き続き、皆様のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

なお、3年連続会費未納入の会員様につきましては、残念ながら「退会」の対応をとらせていただきます。何卒至急ご入金いただきますようお願い致します。また、異動等で住所が変わられた場合には、下記事務局まで、メールにてご一報いただければ幸いです。

○昨年度（2019年度）会費未納の方は、会費6,000円を下記まで納入してください。

【郵便振替】（公社）日本美術教育連合 郵便振替00170-1-86036

※ゆうちょ銀行以外の金融機関（ネット銀行を含む）からの振込先※

《銀行名》ゆうちょ銀行《支店番号》019《預金種目》当座《口座番号》0086036

○お問い合わせ先（事務局）

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20 東洋大学文学部教育学科 北澤俊之

E-mail : kitazawa@toyo.jp

■ 2020年度第10回定時総会 招集通知 ■

2020年度第10回定時総会を下記のように開催いたします。総会終了後には記念講演会も行いますので、あわせて多数ご出席くださいますようお願い申し上げます。

■日 時：2020年5月10日（日）・13：00～14：15

■会 場：東洋大学白山キャンパス2号館16階スカイホール（予定）

（詳細は連合ホームページ<https://insea-in-japan.or.jp/>にて公示）

東京都文京区白山5-28-20（地下鉄三田線白山駅・南北線本駒込駅より、それぞれ徒歩5分）

■ 総会記念美術教育リレー講演会2020 ■ 参加費 無料

（総会終了後14：30～17：00）

■講演者：杉田 佳穂 氏・藤原 智也 氏（講師）／茂木 一司 氏・小林 貴史 氏（指定討論者）

■演 題：バウハウス100+1 バウハウスと日本の美術教育 ―「構成」・「造形」教育の系譜と現在―

■参加費：無料（会員以外の方の参加も歓迎いたします）

■定時総会「出欠はがき」の提出にご協力ください

総会成立の可否は、公益社団法人法によって厳密に規定されています。必ず同封の「出欠はがき」（委任状含む）を投函していただきますようお願い申し上げます。